

[国 語]

豊かな思いを共有し、伝え合う音声言語活動をめざして
 - 3つの話種の形態を取り入れた「話すこと・聞くこと」の力を育てる実践 -

山田由美子*

1 はじめに

学習指導要領解説国語編〔第3学年及び第4学年〕の「話すこと・聞くこと・話し合うこと」の目標には「相手や目的に応じ、調べた事などについて、筋道を立てて話すことや話の中心に気を付けて聞くことができるようにするとともに、進んで話し合おうとする態度を育てる」とある。

さらに、多様な活動を積極的に楽しむことができる3・4年生の児童に「生きて働く言語能力」を育てるためには、「国語科の学習で身に付けた言語能力を日常生活で発揮することが必要であり、そのためには、国語科の学習で相手や目的を設定するなどの具体性のある活動が展開されることが望ましい」としている。

現在、持ち上がりの4年生を担当しているが、昨年度の当初、国語の授業や学級会、集会などの場面において話したり、発表したりすることに対して消極的な児童や、話す声が小さかったり、言いたいことをうまく伝えたりすることができない児童が多いことを感じた。これらの要因として、人前で話すことへの恥ずかしさや、場に応じた話の中味を組み立てることへの自信のなさ、一人で話すことが不安で思うように声が出ない、などの理由から「話したい・伝えたい」という意欲をもてないのではないかと考えた。

そこで昨年度は、音読を取り入れた言語活動に重点を置いて指導を進めた。人前で声を出す場面を増やすことによって、恥ずかしさを取り除き、「話すこと」への自信をつけさせたいと考えたからである。輪番で毎朝行った詩の朗読や、物語の音読発表会などを何度も経験することにより、個人差はあるものの、次第に児童の「話すこと」への抵抗感はうすれ、恥ずかしがらずに大きな声で発表できるようになってきた。

今年度は、自信をもって声を出せるようになった児童たちの「話すこと・聞くこと」に関する言語能力をより一層高めたいと考えた。そのために、4年生になった児童に対して次の3点にスポットを当てた指導を心がけた。

- ア 「何も話すことがない、何を話せばいいかわからない」と黙ってしまう児童への「話すこと」への意欲のもたせ方。
- イ 「聞こえません、何を言っているのか分かりません、もう一度言ってください」という声がかかっている児童への声の出し方や話の筋道の立てさせ方。
- ウ 静かに集中して話を聞いているように見えても、指示された内容を実行に移す場面で「これから何をしますか?」と聞き返すことが多い児童への、話の中心のとらえさせ方。

アのような傾向の児童に、そうになってしまう理由を尋ねてみたところ、「話したいことを考えてあっても、みんなの前だと、恥ずかしいので忘れてしまって話せない」という答えが返ってきた。

安居聡子は、「話すこと・聞くこと」のカリキュラム作成において、その学習内容を選択する際のポイントとして、次の5点を挙げている。※注1

- | | |
|--------------|--|
| 1 単元の形をどうするか | ①聞く話すの学習を主とするもの
②総合的な学習の中に聞く話す場を設けるもの
③取り立てて練習するもの |
| 2 話種のどれを選ぶか | ①独話 / 1対衆 |

* 魚沼市立堀之内小学校

3	どんな話題にしていくか	②対話／1対1 ③会話／1対多 ①一つの話題で聞く話す学習として使う。 ②多角的に時間をかけて話題を育てて充実させていく。 ③小さな練習用（ウォーミングアップ）
4	育てたい力	①基礎基本的訓練として ②主として聞く力を育てる。 ③話の内容を充実する方向で ④話し合う力をつけるために
5	単元の規模	①1～2時間の聞く・話す単元 ②10時間ほどの大単元のなかに聞く・話す場を設ける。 ③10～15分の小単元を継続的に回を重ねていく。

この中の「2 話種のどれを選ぶか」についてだが、授業において、特に意識しないまま、この三つの話種で言語活動を行っていたことが多かった。しかし、大勢の前だと恥ずかしくて話すことができない児童にとって、「対話」の形態に終始する授業では、みんなの前で自ら進んで話し合おうとする意欲をもたせるのは難しい。それは、「1対衆」または「1対多」の音声言語活動によって得られるような、大勢の前で「話す」経験を十分に積むことができないからである。

そこで、話すことへの意欲がもてないなどの児童の実態に合わせ、三つの話種を意図的計画的に、国語科の指導過程に取り入れることを考えた。このことによって、「生きて働く言語能力」を学級の全ての児童に育てていくことをねらい、本実践を試みた。

2 研究の内容と具体的な手立て

(1) 3つの話種の特徴と期待される効果

安居が示した3つの話種を、国語科の学習場面における「話すこと・聞くこと」の児童の活動に当てはめてみた場合、主体となる話し手の児童だけでなく、聞き手の児童にも話種の違いにおける学習効果が存在すると考えた。

3つの話種における話し手と聞き手の立場の違いにより、「話し方・聞き方」が異なるからである。そこで、実際の学習場面において3つの話種がもつ特色とその効果について、次表のように分析した。

話種	形態	特 色	期待される効果と授業場面
独話	1対衆	・話したいことをあらかじめ頭の中で整理したり、文章にまとめたりすることができる。 ・順序や筋道をよく考えて、話す内容を組み立てることができる。	(話す) ・事前に練習を行うことで、児童の抵抗感を少なくすることができる。 (聞く) ・話の中心に気を付けて聞くことができる (朝の会でのスピーチ、感想発表など)
対話	1対1	・話し手、聞き手の役割分担をはっきりさせることができる。 ・相手や目的に応じて、話したり聞いたりする練習ができる。	(話す) ・相手に応じて、自分の話したいことをどう伝えるかを考え、話すことができる。 (聞く) ・相づちを打ったり、聞き返したりしながら会話を進めることができる。 (インタビュー活動など)
会話	1対多	・一つの話題に対して、多様な考えを出し合うことができる。 ・お互いの考えについて、相違点や共通点を明らかにしながら、話し合うことができる。	(話す) ・その場の状況や目的に応じた適切な音量や速さで話すことができる。 ・伝えたいことを選び、自分の考えが分かるように、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話すことができる。 (聞く) ・何を伝えたいのかに留意して聞くことができる。 (話し合い、ディベートなど)

(2) 研究のねらい

「話すこと・聞くこと」の学習活動に3つの話種の形態を取り入れることで、「話すこと」への意欲をもたせ、声の出し方や話の筋道の立て方を身に付けさせるとともに、話の中心をとらえて「聞くこと」ができるようにする。

(3) 研究方法

- ① 話の中心を見つけ出し、問いかけたり聞き返したりすることによって話題を広げていくインタビュー活動の展開
- ② その場の状況や目的に応じた適切な声量や速さで話すことができるようになるための、聞き手による話し手の評価とフィードバック。
- ③ 「何も話すことがない、何を話せばいいかわからない」と言って話したがらない児童の、自ら「話してみたい」という意欲を引き出す討論活動の設定。
- ④ 実践の振り返りと考察

3 実践の概要

実践1 「町に大きなかばがきた・教育出版」話すこと・聞くこと（4月）

4年生になって初めての単元である。大きなかばが町を飲み込み、町中がパニックになる。その様子が描かれた（実際には起こりえない）絵によって、児童の想像力は広がっていく。この単元では、児童が絵の中に登場する町の様子を取材に行った放送記者や、その町の人になりきってインタビューを交わす対話の形態を取り入れて進めていくことにした。

(1) 単元の目標

○大事な内容を落とさずに、話したり、聞いたりすることができる。

(2) 単元の計画（全9時間）

時	主な活動計画
1～2時	○P4・5（町に大きなかばが出現して町中がパニックになっている様子を描いた絵）を見て、場面の状況について話し合う。 ○場面に登場している人物が発している言葉について話し合う。
3時～5時	○放送記者になったつもりでインタビューしたいことを考える。 ○町の人になったつもりで、話したいことについて考える。 ○インタビューする人とされる人になり、対話の練習をし、その様子をビデオに撮影する。 ○自分たちが映っているビデオを見ながら、インタビューする人・される人の良かったところや、気を付けた方がいいところを話し合う。
6～9時	○インタビュー活動の発表会を行う。 ○全員がインタビューする人になり、お家の人に子どもだった頃の様子をインタビューする。

(3) 展開（第5時「対話」インタビュー活動のビデオ検討会）

学習活動と児童の意識の流れ	教師の支援・評価○
<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">インタビューの様子を撮影したビデオを見て、良かったところや気を付けた方がいいところを話し合いました。</p> <p>インタビューする方・される方の感想 ビデオを見ていた人からのアドバイス</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>私の話す声がよく聞こえないよ。 もう少し大きな声がいいな。</p> </div> <div style="border: 1px dashed gray; padding: 5px; width: 45%;"> <p>話し手が一方的に質問しているだけで、インタビューがすぐ終わって、詳しいことが分からないよ。 もっと聞き返したり、相づちをうちながら質問した方がいいよ。</p> </div> </div> <p>・ビデオを見ていた人は、「ご意見カード」をメモし、発表した人に渡す。 ・自分がインタビューする・される姿を見た感想を記入する。</p>	<p>・ビデオを流す前に、どんなことに気を付けて見るのか確認する。</p> <p>○友達インタビューの様子をよく見て、良かったところや気を付けた方がいいところなどを、進んで「ご意見カード」に記入することができる。 ○自分がインタビューしたり、されたりする様子を見て、良かったところや気を付けた方がいい点などを書くことができる。</p>

(4) 児童の変容

視聴覚機器（ビデオ）を活用したことで、児童は画像に映ることを意識してインタビューすることができた。そのため、声に抑揚を付けたり、「そうですか、そうですね」と相づちを打ったりしながら、レポーターになった気持ちでインタビューを楽しんでいた。この活動によって、問いかけや聞き返しによって話題を広げようとする意欲が生まれ、お家の人へのインタビューも活発に行うことができた。

実践2 「みんなで遊ぼう・教育出版」 話すこと・聞くこと・話し合うこと（9月）

発表の声が出るようになり、学級会での話し合い活動でも自分の意見を言える児童が多くなってきた。しかし、自分の意見を伝えることだけに精一杯で、「相手の考えを聞いた上で、自分の考えを言う」「自分の意見を分かりやすく話す」といった、お互いの考えを伝え合う段階には至っていなかった。

そこで、本単元においては、3つの話種を「独話→対話→会話」の順で取り上げていき、特に最後の会話の形態、すなわちディベート形式の話し合いの場面に重点を置いて、お互いの考えを伝え合う力を高めたいと考えた。そして、話し合いの場面では、「話すこと・聞くこと」について気を付けたいことについて、自らめあてを立てた自己評価カードを用意し、毎回、自分の話し方・聞き方を振り返りながら学習を進めることにした。

(1) 単元の目標

- ◎要点や話の中心をはっきりさせて、筋道を立てて話したり、聞いたりすることができる。
- 伝えたいことを選び、自分の考えを分かるように筋道を立てて、相手や目的に応じた適切な言葉遣いで話すことができる。
- その場の状況や目的に応じた適切な声量や速さで話すことができる。

(2) 単元計画（全10時間）

時	主な活動計画
1時～2時	○P78・79（校庭で児童がたくさんの種類の遊びで遊んでいる様子を描いた絵）を見て、遊びについて話し合う。 ○自分がやってみみたい遊びについて、やり方をみんなに説明する。（独話）
3時～4時	○話し合いの仕方が説明してあるP80を見ながら、話し合いの長所・短所について話し合う。 ○自分たちが、話すときや聞くときに気を付けたいことをノートに書き出す。
5時～7時	○グループでどんな遊びをしたいか、実際に司会者を決めて話し合ってみることで、話し合いのやり方を理解する（3人のグループで、司会と二人の話し手）。（対話） ○グループのメンバーや役割を替えながら話し合い、グループで決まったことの報告会をする。
8時～10時	○学級全体で「子ども遊び会議」を行い、みんなで何をして遊ぶか話し合う。（会話） ○自己評価カードを使い、自分の活動を振り返る。

(3) 展開1（1・2/10時間…独話「自分がやってみみたい遊びについて」）

学習活動と児童の意識の流れ	教師の支援・評価○
<p>P78・79の絵を見て、どんな遊びがあるか話し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>自分がしてみたい遊びのやり方を説明したり、楽しそうなところを教えてください。</p> </div> <p>私は長なわのやり方を説明しよう。みんなで遊べるし、連続で跳べると楽しいよ。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>ぼくは野球がいいな。野球はヒットを打ってチームが勝つと嬉しいよ。</p> </div> <p>友達の発表を聞いて、遊びたくなかった遊びをノートに記入する。</p>	<p>○絵の中から遊びを見つけ、ノートに書き出すことができる。</p> <p>○どんな遊びがあるか進んで意見を言ったり、友達の話の聞いたりしながら話し合いをすることができる。</p> <p>・話す前に、話すことをノートにまとめさせ、落ち着いて発表できるようにする。</p> <p>○自分がやりたい遊びについて、遊び方や楽しいところを適切な速さや音量で話すことができる。</p>

(4) 展開2 (9/10時間目…会話「ディベート：みんなで遊ぼう ドッジボールか?それとも野球か?」)

学習活動と児童の意識の流れ	教師の支援・ 評価○
<p>・自己評価カードに今日の話し合いでの「話すこと・聞くこと」についてのめあてを立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日は、自分の意見を一回でも言おう。 ・話を聞くときはメモを取ろう。 ・話をするときには分かりやすく話そう。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>みんなでドッジボールで遊ぶか、野球で遊ぶか話し合おう。</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>ドッジボール ドッジボールがいいと思います。理由はみんながやり方を知っているの、みんなで楽しめると思います。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>野球 ドッジボールはみんながやり方を知っているけれど、ボールがなかなかとれない人がいます。 野球は、バッターが順番に打つことができるので、みんなで楽しむことができます。</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>ドッジボール ○○さんに反対です。確かに野球はバッターが回ってくるけれども、待っている時間が長いです。それにルールがよく分かりません。</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: 45%;"> <p>野球 やり方が分からなければ、分かる人が休み時間に教えてあげればいいと思います。</p> </div> </div> <p>・自己評価カードに今日の話し合いについて記入する。</p>	<p>・前時の話し合いを振り返り、「話すこと・聞くこと」に関して、自分ももっとがんばりたいことや気を付けたいことについてめあてを立てるよう働きかける。</p> <p>○前時の取組に基づいて、話し合いのめあてを立てることができる。</p> <p>・司会者を中心に話し合いを進めるよう促し、その様子を見守りながら、児童の発言で良いところを適宜賞賛するようにする。</p> <p>○自分の考えを積極的に伝えたり、相手によく伝わるように筋道を立てて話したりすることができる。</p> <p>・話し合いの最後に、ドッジボール、野球のどちらがいいか決め、考えが変わった児童は、その根拠となったのは誰の意見だったかをみんなに伝えるようにする。</p> <p>○自己評価カードに記入し、自分の活動の様子を振り返ることができる。</p>

(5) 児童の変容

ディベート形式で「ドッジボールか野球か」という児童にとって話題にしやすい内容だったので、話し合いを重ねるごとに活発になっていった。全部で3回のディベートを行ったが、1回目は一部の児童によって話し合いが進められていたものの、3回目の取組では22人中(少人数学級)、21名が発言することができた。



写真1 ディベートの様子

4 研究の成果及び考察

(1) 話すことへの意欲付け ～みんなの前で話すことが苦手だったA児の変容～

実践1では、対話の形態の音声言語活動を繰り返すことによって、「1対1」での話す技能の習得が進んだ。しかし、大勢の前で話すことが苦手なA児は、ビデオ撮影やみんなの前で発表する場面で、声が小さくなり、黙り込んでしまった。実践2の取組にあたり、このA児に注目し、大勢の前でも「話したいな」という意欲を引き出すためにはどんな働きかけが必要かを考え、言語活動を進めた。

「みんなで遊ぼう」のディベートで、A児は大好きな野球に関する自分の意見をもつことができた。そのため、ディベートで話したいことの内容をノートに進んで記入したり、積極的に発言したりする姿が見られた。その後、A児は朝の会の1分間スピーチでも大きな声で話すことができるようになった。実践2で話すことへの自信をつけたA児は、スピーチのような「1対衆」の音声言語活動に対しても意欲的に取り組めるようになったと考える。

実践2・3回目の話し合いを終えてのA児の感想
たくさん発表できてうれしかったです。司会がやってみたかったです。

(2) 話し方の習得

実践1では、ビデオ視聴で自分の話し方をつかんだり、「ご意見カード」で評価してもらったりしたことで、児童

は客観的に適切な声量や速さなどを考えることができた。また、実践2のディベートを通して、「私は〇〇だと思います。理由は～です」というように、自分の考えや意見を、筋道を立てて話すことができる児童が増えてきた。実践1・2と段階を踏み、適切な話し方を意識したり、意見の伝え方を考えたりしたことで、日常の言語活動を活性化してきたと考える。

(3) 聞く力の向上

実践2の学習活動では、「〇〇さんの意見に賛成（反対）です」「質問です。△△とはどんなことですか」のように、児童は自分の意見・立場を明確にしながら、話し手とのやりとりを行い、話題を広げようとしていた。その後の、朝の1分間スピーチのような「1対衆」の言語活動においても、「(遊びに行った場所は)どこですか・誰と行ったのですか」のように、話し手への質問が増えてきた。一方、授業での「1対多」の発表活動では、「〇〇さんの意見に似ていますが、私は□□だと思います」「(今の意見に)付け足しですが…」など、話し手と意見を絡めて課題を解決しようとする児童が増えた。実践2で聞く力を養ったことが、話題の中心をとらえて聞こうとする意欲につながり、様々な学習場面で、話し手の意図を考えて聞くことができるようになった。

5 今後の課題

3つの話種に基づいた学習活動を積み重ねることで、普段の授業での話し合いや、朝の1分間スピーチで、話し方や聞き方に注意しながら、お互いの考えを伝え合う姿が見られるようになった。しかし、「話すこと・聞くこと」への意欲を引き出すことはできたものの、話し手と聞き手の関係における相互評価に基づいたフィードバックは、十分に行われているとはいえない実態がある。

児童は適切な声量や話し方を意識できるようになったが、学級全体で見た場合、日直で号令を掛ける場面や、代表して発表する場面で十分な声が出ていなかったり、早口になったりすることが少なくない。しかし、実践前と比較すると、音声言語活動自体には物おじせず取り組むことができるようになってきた。そこで、声が出せないのは恥ずかしいからではなく、相手に伝えるための適切な声量や速さを、まだ習得していない児童が多いからではないかと考えた。

今後は、「1対衆」の音声言語活動であり、継続して取り組んでいる朝の1分間スピーチに重点を置き、適切な声量と話す速さの習得を促すことが必要である。

そして、「1対衆、1対1、1対多」の話種を学習場面に応じて効果的に取り入れ、日常生活においても児童がお互いの考えを豊かに伝え合うことができるような、音声言語活動の活性化を図っていきたい。

参考文献

・文部省『小学校学習指導要領解説 国語編』, 1999年, 1～22pp, 60～67pp

※注1) 中山敦子編『子どもが輝く国語科授業 話すこと・聞くこと編』東洋館出版社, 2001年, 16pp